北九州歴史文化塾
講演会

細川興秋
悲運の生涯

2025年1月21日(火)
10:00~11:30 <開場9:30>

会場	小倉城庭園研修室 (小倉北区城内1-2)
参加費	会員1,500円 一般2,000円 (資料代含む)
定員	20名(事前予約制)
申込期限	1月17日(金)

講師 **小野 剛史**氏
かんだ郷土史研究会

プロフィール

1956年、福岡県京都郡犀川町(現みやこ町)に生まれる。福岡県立豊津高等学校(現育徳館高等学校)、熊本大学を卒業。苅田町職員となり、長い間、広報を担当。苅田町合併50周年記念誌『軌跡 かんだの歴史』(2005年)を編集・執筆。著書に『豊前国苅田歴史物語』(花乱社,2016年)、『峠を出でて奇兵隊を撃て-幕末小倉藩物語』(幻冬社,2017年)、『小倉藩の逆襲-豊前国歴史奇譚』(花乱社,2019年)、共著に『京築を歩く』(海鳥社,2005年)、『図説田川・京築の歴史』(郷土出版社,2006年)など。美夜古郷土史学校、かんだ郷土史研究会、苅田山城研究会の会員。

北九州歴史文化遺産　第六十五回

細川ガラシャ　苦難の道を歩んで

細川ガラシャ。日本の戦国時代末期、日本を揺るがし、やがて欧州にもその存在を知らしめた。ガラシャとはどのような人で、及ぼしたことは何だったのか。その苦難の生涯をたどる。

1563（永禄6）年ガラシャは明智光秀惟任日向守の三女として出生。名は玉子。生誕地は越前、京都等諸説あり。母はガラシャが14歳時に死去。兄弟は姉妹2人、弟2人。次男に彼女の心を継ぐ興秋という存在がいた。

1568（永禄11）年、織田信長の足利義紹を奉じての入京に、細川藤孝と明智光秀が付き従い、藤孝の長男・忠興と光秀の女児・明智玉子が出会った。これを機に信長が細川、明智両家の主従関係強化を図って忠興、玉子を結婚させた。両人とも16歳。忠興は信長お気に入りの青年武将になっており、この結婚には光秀の意図もあった、との見解もある。

1580（天正8）年4月、玉子は長男の忠隆を出産。以降、長女のお長（生年不詳）、1583（天正11）年に次男興秋、1586（天正14）年に三男忠利、1588（天正16）年に次女多羅を出産。細川父子は丹後を拝領した。

細川興秋の墓碑（天草市五和町の長興寺薬師堂）

本能寺の変に絡み明智家滅亡　玉子一人生き残る

1582（天正10）年6月2日、本能寺の変勃発。織田信長に続いて長男信忠も二条城で自刃した。事後、明智光秀は細川藤孝に援護を求めたが藤孝は拒み、自らは細川幽斎と号して隠居し家督を忠興に譲った。

忠興も光秀の要請に応じなかった。光秀は6月13日、高松から戻って来た秀吉との山崎の戦いで敗北して逃走中、落ち武者狩りの襲撃を受けて絶命。母も落命し、玉子の兄・光慶は自刃。明智家は滅亡し、玉子のみが生き残った。

明智軍が敗れ、忠興は明智家でただ一人生き残った玉子を「謀反人の娘」とし、「御身の父・光秀は主君の敵なれば、同室に叶ふべからず」と離縁して両家の縁を解こうとし、丹後の僻地・味土野に2年間幽閉したが、この時玉子には次男興秋を宿していた。後、秀吉から忠興との復縁が認められ、宮津に戻って1583（天正11）年、同所で興秋を出産した。

その後、玉子は玉造に細川屋敷を造り、忠興や興秋らとの生活を始めた。当時、興秋は病弱だったがキリシタンの侍女清原マリアを通じて洗礼を受けたのを機に回復に向かっていた。洗礼名ジョアン。玉子自身は「謀反人の娘」と言われ、夫忠興は側室を置くなど苦悩の日々。そんな中で清原マリアの心温まる世話を受け、キリシタンの教え、人間の平等などの話に心を惹かれ、1587（天正15）年、大阪の教会で出会ったグレゴリオ・デ・セスペデスより受洗。ガラシャの霊名を授かった。ガラシャはラテン語の「グラティア」（恩寵・恩恵）に由来したもので、セスペデスによる命名とされる。

同年6月、秀吉が博多で伴天連追放令を発布。高山右近は改易された。忠興はガラシャに改宗を迫ったが応じず、翌1588（天正16）年には次女、1598（慶長3）年には三女を産んでおり、忠興はガラシャを黙認し夫婦関係は保たれていた。1598（慶長3）年秀吉死去。忠興は徳川家康の指揮下に入った。

ガラシャ自害す。石田三成の予期せぬ人質要求に屈せず

1600（慶長5）年6月、上杉景勝征討出陣に忠興も従い、家康の留守を狙って石田三成が徳川討滅を謀って挙兵。全軍を味方に引き入れる手段として大阪居住の大名の妻子らの人質化を図り、細川屋敷でもガラシャを人質にと要求した。徳川方で徹底抗戦の忠興は拒否。翌7月、ガラシャは侍女らに屋敷からの退去を命じ、神への祈りを捧げ、付き添いの小笠原小斎に自らの胸を突かせて果て、小笠原も自刃した。この時、二男興秋、三男忠利は父忠興に従っており、難を逃れた。

細川ガラシャ図

忠興にとってガラシャは大切な妻だが、表に出したくない「謀反人の娘」でもあり、辱められる可能性を徹底的に潰したかった。それは彼女の名誉を守るためであり、ひいては忠興、細川家の名誉を守ることに繋がるものであった。

そんな彼女の死を侍女から聴いたイエズス会神父オルガンティーノは悲嘆に暮れ、細川屋敷焼け跡でガラシャの遺骨を拾わせ、葬儀と埋葬を執行した。

ガラシャの次男興秋は12歳の時、叔父興元（父忠興の弟）の養子となり、キリシタン武将として成長。関ヶ原の戦いには初陣で参戦して功名を挙げ、細川家は豊前39万石を拝領した。だが1615（元和元）年の大阪夏の陣では細川家存続を配慮して興秋は豊臣方、父忠興と弟忠利は徳川方として参戦。大阪城落城で興秋は父忠興に切腹を命じられ、山城国で自刃したとされる。

だが近年、忠興は身代わりを斬首し、興秋を生き長らえさせたという説が有力だ。それによると興秋は1621（元和7）年に脳梗塞を患い、僧侶に身を移して香春町採銅所の不可思議寺に人質として、監視下に置かれていたことが判明。400年目にしての生存判明だった。

忠興は1601（慶長6）年、豊前に入国して中津城を居城とし、1603（慶長8）年には小倉城に入った。以後、1632（寛永9）年、熊本への転出までの30年間、小倉を細川家本拠とした。石田三成の強要を拒否して自害し細川家を守ったガラシャへの思い、彼女を介錯した小笠原小斎らへの恩義を感じてか、それまでのキリシタン嫌いから態度を一変し、大阪での追悼ミサに続けて娘2人の希望に応じて中津でも追悼ミサを挙げた。この時、小笠原家一族も豊前に入った。追悼ミサには大阪からセスペデス神父を呼びよせ、以降、小倉を中心に宣教を許し、キリシタンを庇護・支援した。

ガラシャの名、西欧にも響き残る

ガラシャは日本よりヨーロッパで知られる人物になった。その最期がイエズス会士によってヨーロッパに伝えられ、ウィーンでは1698（元禄11）年「TAGOの奥方」と題してオペラが上演された。西欧ではガラシャについて「世界の聖女」とまで評されている。その辞世の句

「散りぬへき　時しりてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ」

享年38であった。

シニアスタッフ　村田和夫